

今に生きる「二条河原の落書」

松浦 純子

「此比都ニハヤル物 夜討強盗謀論旨……」で始まる詩は後醍醐天皇の政庁に近い京都の二条河原に掲げられた落書である。七五調を基本にしてリズムカクに八十八節続くこの有名な「二条河原落書」は、鎌倉幕府が滅び、新たに始まった建武の新政の失敗を鋭く批判・風刺している。この政府は成立からわずか三年足らずで滅んでしまった。さもありませんかと思う。

さて、時代は七〇〇年下って令和の二〇二三年。夜、他人の家や店を襲い車や貴金属を強奪する事件。見ず知らずの人を突然刃物で襲ったり、カづくで他人の物を奪い取ったり、さらに留守宅に押し入り現金を奪って逃走する事件。強盗と鉢合わせになり運悪く命までも奪われる人もいる。そして、銀行員を装ったり、偽の請求書を送りつけたりする特殊詐欺事件。日々物騒な事件が続くと、「夜討強盗謀論旨」が頭に浮かぶ。

落書ではさらに批判・風刺が続く。急に羽振りがよくなる者と落ちぶれて路頭に迷う者。犬追物をやろうにも弓を引けず、落馬の回数が増え矢を射る数を上回る武士。京都と鎌倉の連歌のやり方をごちゃ混ぜにして調和がとれていないエセ連歌。お役所の建物は次々と建てられる一方、住むところのない人もいる。大した手柄をあげていないのに上司にうまく取り入って大出世している者もいる。新しい時代は驚くことばかりで、ここに揚げた落書は人々が噂する十分の一に過ぎない、で落書は終わる。

二十一世紀の世の中にも、コロナの流行ですっかり稼いだ人と閉店に追い込まれて収入の道が途絶えた人。タワマンに住む富豪と炊き出しに頼る路上生活者。公人として当然知っているべき常識を学ぼうとしない人。これはまさに訓練・練習をさぼっている武士と同じ。忖度が上手で大出世する人もいる。人間の本質は七〇〇年前と変わっていないと思わざるを得ない。

「二条河原の落書」の作者は新政権に不満を持つ僧侶か貴族ではないかと言われているが、今の世の中を風刺した「二十一世紀の落書」を書いてくれる人はいないだろうか。